

脇田和と猪熊弦一郎 ～モダンの展開～



脇田和《暖帯》—「脇田和と猪熊弦一郎」より—



猪熊弦一郎《飛ぶ日のよこび》
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵—「脇田和と猪熊弦一郎」より—
©The MIMOCA Foundation

- 名物裂と茶道美術【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 春の優品選Ⅰ 茶道美術を中心に【古美術】
- 第75回 現代美術展
- 前田家の刀剣・甲冑・陣羽織【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 春の優品選Ⅱ 茶道美術を中心に【古美術】
- 春のいろどり【近現代絵画・彫刻】
- 鳥とりどり【近現代工芸】

- バスツアー募集記事
- 4月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

脇田和と猪熊弦一郎 ～モダンの展開～

主催：石川県立美術館

後援：北國新聞社、NHK金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、北陸朝日放送

4月20日(土)～6月9日(日) 会期中無休

石川県立美術館は平成二十七年度に、一般財団法人脇田美術館より三一七点の脇田和作品の寄贈を受け、現在三二二点の作品を収蔵しています。平成三年に脇田和が軽井沢に美術館を建てる際に厳選し、基本としたすべての作品と、それ以降の代表作を主体とする、油彩一五四点、水彩素描七十二点、版画九十五点の大規模なコレクションです。

脇田家は、二代藩主前田利長の代から明治維新まで加賀藩に仕え、御算用場奉行、町奉行などを勤めた武士の家柄で、兼六園のすぐ隣にある「玉泉園」が屋敷跡です。

脇田和は、明治四十一年、実業家脇田勇の次男として東京青山に生まれ、十五歳でドイツに留学してベルリン国立美術学校に学び、絵画や各種の版画技法など美術全般にわたって研鑽を積みました。帰国後は戦前の洋画壇に頭角を現し、昭和十一年、猪熊弦一郎、小磯良平らと新制作派協会を創立し、以後、常に具象絵画の第一線にあって画壇をリードしました。抒情であると同時に堅固な構成を持つ脇田作品は、情と智とが高いレベルで融合し、その融通無碍の世界は様々な世代から幅広い支持を得ています。

本展は当館の脇田作品を核とし、脇田と交流の深い画家達の作品を交えて、戦後美術界の様相を示すことを趣旨としています。今回は交友画家の第一弾とし、猪熊弦一郎の作品を交えて開催します。

猪熊弦一郎は明治三十五年香川県高松市生まれ。東京美術学校で藤島武二に師事しました。大正十五年、帝展に初入選し、以後十回、第十四回で特選を得ます。昭和十一年、帝展改組の美術界混乱期に小磯良

平、伊勢正義、脇田和らと新制作派協会(現・新制作協会)を設立。その後フランスに留学し、マチスに師事。戦後、二十六年には上野駅コンコースに大壁画を描き、その後も建築物と関わる制作を数多く手がけています。三十年から五十年までニューヨークを制作の場とし、帰国後も精力的に創作を続けました。展示は二部構成で、第一部では脇田と猪熊の作品を十年単位に併置し、二人の個性あふれる創作の歩みを、第二部では脇田の初期から晩期まで、詩情あふれる作品の展開をご堪能いただきます。

◆観覧料

一般一〇〇〇円(八〇〇円)

大学生八〇〇円(六〇〇円)

高校生以下無料

※二階コレクション展観覧料金を含む

※()内は二十名以上の団体料金

※当館友の会会員は会員証の提示で団体料金

◆関連イベント

講演会

日時／四月二十一日(日)午後一時三十分

演題／脇田和と猪熊弦一郎

—心の存在ありかを求めて—

講師／木島俊介氏(ポロラ美術館館長)

会場／美術館ホール(定員二百名)

申込不要・聴講無料



猪熊弦一郎《ニースの女》
香川県立ミュージアム蔵



脇田和《母子像》

名物裂と茶道美術

3月26日(火)～4月15日(月) 会期中無休

名物裂とは、そのほとんどが中国の宋・元・明・清の時代に製織され、鎌倉・室町時代から江戸時代中期にかけて日本に舶載され、わが国の茶道をはじめ近世文化の成立に重要な貢献をした染織品です。種類は多岐にわたり、金襴・緞子・錦・風通・印金・紗・絹・間道・モール・更紗などがあります。時代区分としては極古渡(十四世紀)、古渡(十五世紀)、中渡(十六世紀前半)、後渡(十六～十七世紀)、新渡(十七世紀)とされていますが、実際に極古渡に属するものは非常にまれです。こうした裂地類は舶載の当初は、高僧の袈裟や武將の衣服、能装束、あるいは寺社の帳や打敷として用いられたもので、茶道の興隆とともに名物茶道具の仕覆や書画の表装裂として、優れた鑑識眼を

もつ茶人たちによって賞翫され、今日の「名物裂」が形成されていきました。前田家の名物裂は、加賀藩三代藩主・前田利常が一六三七年に、当時唯一の海外への窓口であった長崎へ家臣を目利きとともに遣わせ、値段もかまわずに買い求めさせたといわれます。それは、今日でも質量ともに優れたコレクションとして評価されていますが、利常の名物裂収集には、第2展示室の特集で次ページでもふれる文化アドバイザー・小堀遠州との交流が大きな影響を与えていると考えられます。今回は、この名物裂を中心に、《玳皮盞天目茶碗(梅花天目)》や、《古瀬戸茶入 銘孫六》などの茶道美術をあわせて展示します。

(小石畳地宝珠形鳳凰雲文様金襴(興福寺金襴))(部分)

◆関連イベント

キッズ・プログラム「集まれ、鳥たち！美術館の森へ」

日時／五月十一日(土) 午前九時三十分～十二時

内容／美術館周辺でバードウォッチングの後、美術館の窓を飾る

鳥シールを制作します。(協力：日本野鳥の会(石川))

対象／小学生以上(小学生は保護者同伴)

申込／電話にて申込・先着三十名・参加無料

〇才からのファミリー鑑賞会

日時／①五月五日(日) 午後二時～三時三十分

②五月六日(月・振) 午前十時～十一時三十分

内容／小さなお子さんと一緒に美術館を楽しむ方法をご案内。

対象／〇才からの小さいお子さんとその保護者

講師／富田めぐみ氏

(NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表理事)

申込／電話にて申込・各回先着三十名

保護者の方は三人目から観覧料必要

展示室でスケッチGO!

日時／四月二十七日(土) 午前十時～十一時三十分(受付時間)

内容／磁気式ボードを使ってお気に入り作品をスケッチ。

会場／企画展示室・申込不要・観覧料必要

当館学芸員による土曜講座

五月十八日(土)「略伝脇田さんと猪熊さん」

六月八日(土)「猪熊弦一郎とアメリカ美術」

六月八日(土)「猪熊弦一郎とアメリカ美術」

担当：前多武志 学芸専門員

時間／いずれも午後一時三十分から

会場／美術館講義室・申込不要・聴講無料

ギャラリートーク

日時／会期中の毎週日曜日 午前十一時から(四月二十一日を除く)

会場／企画展示室・申込不要・観覧券必要

第3～9展示室

第75回 現代美術展

日本画・彫刻・書

3月29日(金)～4月15日(月) 会期中無休

第2展示室

春の優品選 I

茶道美術を中心に

3月26日(火)～4月15日(月) 会期中無休

石川県は、茶道がさかんな地域として知られ、当館の古美術コレクションは、国宝・重文の「雉香炉」をはじめ、茶道美術が大きな位置を占めています。そこで「現代美術展」の会期と五月の連休期間に、二期にわたって茶道美術を中心とした優品を選んで展示します。「茶道美術」の範囲ですが、実際の点前に用いる道具のみならず、広い意味の茶事全般に関連するものということ、屏風もおもてなしの道具として含めたいと思います。

石川県が、茶道文化の拠点としての「お茶どころ」となったのは、加賀藩祖・前田利家、二代藩主・利長が織田信長、豊臣秀吉の茶堂(頭)であった千利休から直接茶の湯を学んだことが深く関わっています。さらに、利休の弟子であった古田織部に茶の湯を学ん

だ小堀遠州が、三代藩主・利常、四代藩主・光高の文化アドバイザーのような役割を果たし、具体的な茶の湯の助言のほか、名品収集の斡旋もしています。この、文化アドバイザー・遠州のお手本となったのが、父の代から前田家に仕えた本阿弥光悦です。この人間模様を思い起こせば、利常の時代から前田家に縁が深かった裏千家四代の仙叟宗室が、五代藩主・綱紀に茶堂茶具奉行として仕えた必然性も理解できます。

このような文化的背景により、茶道文化が石川の個性として今日さらに魅力を発信しています。今回の特集では県文《粉引茶碗 銘楚白》や、県文《光悦色紙貼交秋草図》など広義の前田家ゆかりの優品や、明治時代以降に当地に集められた優品をあわせて展示します。



石川県文《粉引茶器 銘楚白》

昭和二十年十月に第一回展が開催された現代美術展は、本年七十五回展を迎えます。その間、文化勲章受章者、日本芸術院会員、人間国宝をはじめ、多くの実力作家を生み出し、その成果は「美術王国石川」として大きく花開いております。

本展では、所属会派を超えて、日本画・洋画・彫刻・工芸・書・写真の六部門から、石川県美術文化協会会員らの秀作に、一般公募からの入賞・入選者の意欲作を一堂に展示します。

◆部門

- 日本画(第8・9展示室)
 - 彫刻(第7展示室)
 - 書(第3・4・5・6展示室)
- 金沢21世紀美術館では、洋画・工芸・写真が展示されます。

◆観覧料(金沢21世紀美術館と共通)

団体	前売り	当日	一般	大高生	中小生
八〇〇円	九〇〇円	一、〇〇〇円		六〇〇円	五〇〇円
四〇〇円	五〇〇円				四〇〇円
					三〇〇円

※当館友の会会員は会員証の提示で団体料金

◆作品解説 会期中、作品解説を行います

第2展示室

春の優品選Ⅱ

茶道美術を中心に

4月20日(土)～6月9日(日) 会期中無休

Ⅱ期では、本阿弥光悦の作品に替わり、高山右近ゆかりの作品を展示します。高山右近(一五五二～一六一五)は織田信長、豊臣秀吉に仕え、武将としての傑出した能力は秀吉をはじめ諸将から高く評価されました。また千利休の高弟としても活躍し、同時にキリスト教布教にも尽力しました。一五八七年、秀吉の伴天連追放令により棄教を拒否したことで領地を没収され追放の身となりましたが、翌年加賀藩祖・前田利家により金沢に迎えられました。以後、一六一四年江戸幕府のキリシタン禁令により国外追放となるまでの二十六年間を金沢で過ごし、重臣として政務にあたることもに利休高弟として茶の湯を広め、また布教活動も続けました。また、二〇一七年にはカトリック教会の崇敬対象である「福者」に認定されたことから、石川県が右近ゆかりの地とし

て世界的に注目されるようになりました。今回は、休庵公に宛てた右近の自筆書状と、この度、金沢聖霊修道院から寄託をいただいた《象牙線彫キリスト・聖母子念持像(木彫蓮蕾形合子入り)》(伝横山ルチア所用)、《猪目金銀象嵌花クルス文刀子》(堆朱福祿寿文拵)、《鑄金線刻葡萄文鐔》の三点を展示します。この中では、高山右近の娘で、加賀藩の重臣・横山長知の嫡子・康玄に嫁いだルチアが、右近とともにマニラへ追放され、右近の死後帰国した際に携えていたと伝わる《象牙線彫キリスト・聖母子念持像》が特に注目されます。右近が没した翌年の一六一六年には、右近の妻子らが帰国したとの報告が、スペインのトレド文書館に保管されていたというニュースは衝撃的でした。



《象牙線彫キリスト・聖母子念持像》金沢聖霊修道院蔵

前田育徳会尊經閣文庫分館

前田家の刀剣・甲冑・陣羽織

4月20日(土)～6月9日(日) 会期中無休

室町時代以後、大規模な集団戦が展開されるようになったことにもない、武将が戦場で着用する甲冑や陣羽織にも大きな変化がおとずれます。甲冑については、容易に着用できることや、迅速な動きが求められた結果、重厚な大鎧に対して歩卒用の簡便な鎧だった胴丸の機能が再認識され、上級武士も積極的に用いるようになり、兜と袖をあわせて大鎧と同じ構成とするスタイルが定着しました。製作技術も向上し、素材や形状の選択肢も広がりました。さらに下克上の時代相ともいうことができる、伝統的な価値基準を否定する「かぶき」の精神は、武将自身を飾り、荘厳する様々な「変わり兜」を生みだしました。

そして、通気性を高めるために改良された甲冑を雨や寒風から守り、あるいは灼熱の日射しによる温度上昇を緩和する目的で、甲冑の上から着用する陣羽織の重要性も高まりました。特に桃山時代以降、毛織物の仕上げの際に水などで湿らせて熱・圧力を加えてフェルト状にしたラシャ製のものが重宝されました。この陣羽織も、色、形そして配される文様に様々な工夫がされました。今回の特集は五月の連休や、加賀藩祖・前田利家が金沢城に入城した時期に合わせて毎年六月に開催される「百万石まつり」を念頭に、全国から来館されるお客様に加賀藩主前田家の「武」の側面的一端をお楽しみいただけるよう、歴代藩主所用の甲冑・陣羽織を中心に展示します。また前田家ゆかりの刀剣として、加賀藩三代藩主・前田利常が孫の五代藩主・綱紀の武運長久を祈願する目的で、高岡の瑞龍寺に奉納した「瑞龍寺奉納刀」のうち、貴重な伝存品である藤原長次による一口をあわせて展示します。

《鯨尾形兜》(前田利長所用)

第5展示室

鳥とりどり【近現代工芸】

4月20日(土)～6月9日(日) 会期中無休

古くから鳥たちは、和歌に詠まれたり、鳴き声が愛でられたり、あるいはおめでたいしるしとして讃えられたりと、人々の身近に親しまれてきました。工芸の世界でも、正倉院宝物にはすでに鳥の姿が登場します。

さて、石川県立美術館の隣(現在の広坂別館あたり)が野鳥園であったことをご存知でしょうか。現在は小高い丘が残るばかりですが、「野鳥(やちよう)」という言葉を作り出した中西悟堂(一八九五～一九八四)の歌碑が建てられています。悟堂は金沢に生まれ、東京で育った歌人です。野鳥の自然な姿を愛し、日本野鳥の会を創立しました。今回の展示では、日本野鳥の会石川の方々にご協力いただき、工芸作品に登場する鳥の生態を写真や解説によってご紹介しま

す。会期中には、兼六園周辺の野鳥を観察するイベントも企画しています。こうした活動を通して、身近な鳥の姿に目を向けていただくきっかけともなれば幸いです。

また、実在の鳥(写真)、スケッチ、下絵、図案、そして作品へとスライドする工芸作家のまなざしを、皆さんに追体験していただきたいと思っています。木村雨山「写生図巻」、藤井観文「片切沈金彫鴉文棚下絵」からは、羽毛まで丁寧に描きこんだ図から、友禅や沈金の技法を活かして一種のデフォルメがなされてゆく過程をたどることができます。色、かたち、技法、とりどりの作品から工芸の世界をお楽しみください。



中村陶志人《待春》

第3・4・6展示室

春のいろいろ 【近現代絵画・彫刻】

4月20日(土)～6月9日(日) 会期中無休

近現代の絵画・彫刻分野は、「春のいろいろ」と題して、所蔵品の中から春から初夏にふさわしい作品を展示します。我々が作品を前にしたとき、「さてこの絵の季節は？」と、つい想いを馳せるのは、風景画だけにとどまりません。それは鑑賞する側が四季に敏感なだけでなく、制作者が変化に富む四季の中に暮らしていることで、季節感がおのずと作品にも隠れているからかもしれません。

日本画分野では、仁志出龍司《生生》から木々の芽吹き頃や、石川義《森の精達》からモリアオガエルの繁殖期の様子を通して、生命の息吹を感じてください。

洋画部門では、小糸源太郎の《春蘭》と絶筆《春光》、ともに春爛漫の桜景色を描いた作品や芽吹きや、田

植えの頃を描いた村田省藏《芽吹き》、田圃の水面に映える周囲の景色を律動的に描いて春の光と風を感じさせる新保甚平の《水光》などをご紹介します。

彫刻分野では、春を感じさせる人物彫刻や鳥にまつわる彫刻を紹介します。得能節朗《春》は、手のひらに小鳥を乗せ、空を見上げている女性像で、春の暖かい日差しを感じることもできる作品です。また、鳥にまつわる作品は、七面鳥、駝鳥などの具象作品や、羽をイメージした重田照雄《波にゆれる鳥》をお楽しみいただけそうです。

素描・版画部門では、企画展に関連し脇田和の作品から、《輪花》《椿苑》など花をテーマにした作品などを展示致します。



小糸源太郎《春蘭》

参加者募集

2019年度 友の会第17回バスツアー 珠洲をめぐる

期 日／二〇一九年五月十九日(日)
集合時間／午前七時三十分
発 着／金沢駅西口団体バス乗り場
参加代金／友の会会員 七七〇〇円
会員以外 八二〇〇円
募集定員／四十二名

◆見学地

【金蔵寺】北陸三十三観音霊場特番札所、北陸三十六不動霊場五番札所です。
当日は境内を散策しながら、寺院の歴史にふれます。

【時国家(本家上時国家)】約百八十年前に建造された重要文化財の木造民家とその調度品、鎌倉風の池泉回遊式庭園を、解説を聞きながら鑑賞します。

【須須神社】日本海側一帯の守護神とされ、崇神天皇の時代に創建された由緒ある神社です。宮司の方から解説を聞きながら、神社とその宝物について理解を深めます。

【珠洲焼資料館】珠洲古陶、窯の優品や出土品などを、学芸員の解説を聞きながら楽しみます。また、あな甕窯(復元古窯)についても簡単に説明して頂きます。

◆申込方法

往復はがきに下記の事項を記入し、ご応募ください。応募者多数の場合は抽選になります。



須須神社

- ① 往復はがきの裏面に「美術館バスツアー希望」と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・住所・電話番号・会員番号(ある方のみ)をお書きください。
- ② 返信はがきの表面には返信先をはっきりとお書きください。消えるボールペンは使用しないでください。
- ③ 返信はがきの裏面には何も書かないでください。

◆応募先

〒九二〇一〇九六三 金沢市出羽町二一
石川県立美術館バスツアー係

応募締切／四月十三日(土)必着

※応募者一名につき、往復はがき一通でご応募ください。

ペアでお申し込みの方は、お一人ずつはがきを投函し、その上で「〇〇さんとペア申込」とお書き添えください。

※急な階段や歩きにくい道、坂道などが行程に含まれます。

4月の行事予定

21日(日)	<p>■「脇田和と猪熊弦一郎」展記念講演会 午後1時30分～ 美術館ホール 聴講無料</p> <p>「脇田和と猪熊弦一郎」心の存在を求めて― 講師 木島俊介氏(ポーラ美術館館長)</p>
27日(土)	<p>■展示室でスケッチGO! 午前10時～11時30分 2階展示室</p> <p>展示室でお気に入りの作品を、磁気式ボードを使ってスケッチ!</p>
28日(日)	<p>■映像ギャラリー 午後1時30分～ 美術館ホール 参加無料</p> <p>「文化人記録映像 脇田和」(30分) 「世界・美の旅 ピカソ」(30分)</p>

石川県指定文化財《黒楽茶碗 銘北野》くろらくちやわん・めいきたの
口径 10.4～10.9cm 底径4.8cm 高さ 8.4cm 桃山時代 16世紀

長次郎 ちょうじろう



『大正名器鑑』に「北野大茶湯に用ふ」と伏見屋覚書にあると記されたことで、多くの人が「北野」の銘につまずきます。近年も、「豊臣秀吉が北野大茶湯で飲んだ茶碗」と新聞報道された時は背筋が凍りました。本碗の内箱蓋裏には、表千家四代江岑宗左（一六一三～一六七二）による「利休判在之ヲ覚今程キエ見不申候」黒茶碗 左（花押）」の書付があり、この書付は所有者の興善院に依頼されたことが添状からわかります。そして、蓋表には、表千家五代随流齋宗佐による「北野黒 興善院 内老父書付有 宗左花押」の書付があります。ここから、「北野」の銘は随流齋の時代に付けられたものであり、「北野大茶湯」に用いられたとの伝承は後世の創作であることが確認できます。

本碗の伝来は千利休所持の後、「北野の」興善院から塗師の中村宗哲家に渡り、表千家七代如心齋が買い取り、江戸の豪商冬木家が千利休の遺偲を千家に戻した際に返礼として贈られました。この事実は、本作品が利休遺偲と同等の意義と価値があるものと表千家において判断されていたことを示すものです。筆者はかつて当館ホームページの「学芸員コラム24」で本碗から「名物前田藤四郎」に匹敵する秘めた威風凛然を感じます。と述べましたが、その思いは、長次郎の黒楽茶碗の中でも端正な作りである本碗に接する度に強まります。

簡単に思うな。本碗を寄贈された数寄者は、最後にこうおっしゃいました。その時の厳しい表情と口調は今も忘れません。

次の展覧会

平成31年6月14日(金)
～7月22日(月)
会期中無休

	前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
	絵画優品選	名刀と刀絵図
第3・6展示室	第4展示室	第5展示室
新収蔵品と優品 【近現代絵画・彫刻】	村田省蔵展 【近現代絵画】	手わざの手ざわり 【近現代工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
4月1日は第1月曜日より
コレクション展示室無料の日

4月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

4月の休館日は
16日(火)～19日(金)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上

県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ 092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第426号(毎月発行)
2019年4月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL: <http://www.ishikawapref.ishikawa.jp/>